



~7
4376



菅野文庫

三編



へ7
4376

菅野文庫

門 7
號 4376
卷

五代目一中聲曲

菅野序遊章指直傳

菅野文庫

書林 文花堂

島田藏書

二編標目

初見物大志

志心悪姫

少お道外

傾城歩向

唐崎心中

名知川

柳の前

泉月の前

河内通

家元万歳



菅野序遊

菅野序稿	菅野序作	菅野序柳	菅野序雀	菅野序光	菅野序松	菅野序節	菅野思聲
	菅野光八	菅野彦造	菅野其遊	菅野忠次	菅野榮次郎	菅野文次郎	菅野幸次

都見物尤衛門



五色の糸のありよい路といく

物ハ手深の情ありケ松は著

洛中方一の果鞍者

東西南北凡そけ里を

あ日る物たまつと我ホデ忌す

親なり子なり高貴なり

世信なり苦なりたゞしかり

世界ハじ路ハめづ庵ハ

みやらの辰己耳塚の

京ハ孝らよ申人お右

まらぬがたけ大佛殿

きんこくお月きらお佛さる

あれをあれ舞の穴の

かゝるあはれし出らぬ

さうもてはらふあれ佛持を
ませらぬお袋屋の御れ
おつりけんちの社が田んやれ
まーだちんまゝあはれもの
あはれ大^キさぐらあらるちん

ウレニ

幾の百ちめくろひたん
あつらふ佛をおごんてあら
おもんねおのちんあしめ
ヤアあつらふちんあしめ
好色女いづばさくねあしめ

寺所の多物をあつらひ

きりぎりすの連ふりたる

あつらひのまじりたる

ちとたづね中たきたる

あの方よあつらひの

あつらひのまじりたる

我らハ初る物をあつらひ

あつらひのまじりたる

芝居奥行めたる

あつらひのまじりたる

ワタ

ワタ

ワタ

ワタ

かみしれ時を人も何をさる
鹿のうき料のゆきや
よ敷るをうめれせんきりぞ
樽太鼓のきりりり
唐も日本も舟ちりりり

ケレキ

志の市口やめたきりり
めろおぼろおぼろを
あしきりりりりりりり
きりりりりりりりりり
かきりりりりりりりりり

ま^ニま^ニあ^ニれ^ニを^ニば^ニは^ニあ^ニら^ニん^ニせ^ニよ

河の口前^ニに^ニか^ニれ^ニる^ニま^ニ

日^ニを^ニ一^ニし^ニも^ニ此^ニ大^ニ佛^ニ餅^ニ

大^ニ佛^ニ一^ニき^ニを^ニあ^ニら^ニさ^ニる^ニは^ニ

ら^ニう^ニみ^ニら^ニぶ^ニ六^ニ三^ニ萬^ニ三^ニ千^ニ

六

三^ニ百^ニ三^ニ拾^ニ三^ニ本^ニあり

白^ニが^ニ一^ニよ^ニを^ニえ^ニる^ニ一^ニ清^ニ水^ニ寺^ニ

地^ニ主^ニの^ニ桜^ニも^ニ寺^ニの^ニ跡^ニ

あ^ニら^ニや^ニさ^ニら^ニれ^ニ高^ニの^ニ世^ニ女^ニ

は^ニら^ニう^ニら^ニゆ^ニら^ニる^ニ角^ニち^ニま^ニ

まぶれ木の葉くも大座を
ふのやまの木の葉の音
のちきりなまぶれきこ
かざれまぶれ丸山
まぶれまぶれまぶれ

舟のえあひば楫とよ
名よまぶれまぶれ二
まぶれまぶれまぶれ
まぶれまぶれまぶれ
まぶれまぶれまぶれ
まぶれまぶれまぶれ

あびるくちまを人あは
鐘も庵んくならぬ
あけづこまう寸馬あ
あ月のゆるれあも
ちびるがけあ鼓鼓や
ケレハ

きけたこもああ
けざく一粒あ倍
あを符あ申あ
あさハ筆屋布袋屋の
あを粉あ砕くあ
あの粽

るのまじく数々價の
からやくしじ大正舞
み郎季のふらばらる追の
考のまじくもりのみどる
りり水男ありの恵美垣

万歳樂々々々々々々々々々
途のまじくもりのみどる
清代もまじくもりのみどる
出え敬つるまじくもりの
少くもまじくもりのみどる

美面るはるやまきさむ量も
らきさむあざりり敷ら
海よめささしあらり敷
志しは女部を人妻なりと
かぶるはるはるはるはるはる

いはいは女部を人妻なりと
よるはるはるはるはるはる
箱梅かろいはるはるはる
いはいはるはるはるはるはる
かろいはるはるはるはるはる

厨と姉と高砂也相生の
稻尾上凡續事持大と
福大進福壽海圓方と年
國氏繁昌午獲樂
萬と歳と我祝計一歌

少將道行

あつしをよ物少なる言を
かよふ中よ自然傘の
ふかきさけの敷由ま志の
ちと何ともさうさけ同れ

はらさけやめ君心を
得在川海り子砂川也
木幡の里よ馬はあれども
きくまをとおくたかちまじし
りくハ海りく海りハきく

海りく海りく海りく
らもあしれくあしれく
きみのまゝらひまじ
おれりちりしりちり
けりまゝる夜と通り

九中一丸夜も成りし中
うきうきの世もあま
きくーおのあまおあ
はあはあの中らあ
ああああああああ

ああああああああ
ああああああああ
ああああああああ
ああああああああ
ああああああああ

ふのかさしきちふるさもなま
神社清も流しせし後
神のらうけぢぢあらん
正縣もちあはるもなま
此のさしきあはるも

る夜のらびをたごへし
由きおさる此ハ川も
さるもけり我はれも
木のぬたがりき比敷尻
傘をとるけちぬきあ

傘とくぬとるみあはく
おのとはひもり君ゆへ
こころもくさりなご
小所侍前の住なき
車のおゆるぎなき

と心
半兵衛

唐崎心中

かたはちもあつむし
雨走んくさ敷夜ま
あはく傘たきおん
はらひたけしとる路の

はたきまをさむかぢんあいの
種ぐくちくちく足しとま
のこもあぢたかちん
ちかまをさむかぢんあいの
いぬのうまをさむかぢんあいの

いぬのうまをさむかぢんあいの
ちかまをさむかぢんあいの
かぐちんあいのうまをさむかぢんあいの
すくちんあいのうまをさむかぢんあいの
すくちんあいのうまをさむかぢんあいの

消くまき村をぬきしりや三井の
古寺あしうらよとけりぬく必し
て述もたれ親文は流つよき
矢橋のあしり帰帆をも
おのひまを衆業の秤はかり

うもぬ行なれ我ハ小島の
石山は秋の月と心大いには
女心のちうねさハおねおねをむ
うらまの珠敷けむがころとく
法をきくは打波石隆つとむ

おつ敷屋ご子もあふを

つらつら川生れ流を

客の敷く偽まき守の流目

夕照と眾あつらへく人の世を

思ひやせむあふら行時雲集れ

晴嵐と此もむ風のつら思ひ

比良れ暮雪とあつすの

叙の山れ雪解はと津の川

遠近のるを催す山あふ

あふたらしくきらくあつ

次之れを傘を帆より法を
らぎ敷る帯の敷物より
此行出雲のあは定なき
たまのむも好むる崎の
ひとの招みおく者より敷

柳の前道行

法はあはれも水意風
いづれなむらん柳のま
あまみむもくもくぐ
あつ敷はれも様はる

いぬあつ風俗ふうぶくの江戸藤子
位也ゐや 挿し振さしふるのちあ人小袖
漆うるし彫うづから柔なるゝ出るでるをしつゝ
大母おほははの家いへの感かん心しん技ぎを
見みままくく平へい々々ととささんんささ

まのまのぬくぬく入いるるまのまの
ちをちももああののままののままののまま
いいるるままののままののままののまま
ああののままののままののままののまま
ああののままののままののままののまま
ああののままののままののままののまま

殺も少く死なむもなげきぬ
ふら津紋のきく様也
市々人目よむぬども
君はたぐらぬ濃きむささの
ふら草由り七くきよ一先

乃のちうりと連敷なる
めれとの清好なる草あや生れ
及どのむらむらぬなる
たらしくもむらむらなる
たのむらむらぬなる

去来ゆく延喜の仕業とく

多ク

もはむ白み浦河成す

うげの志何らんも

酒を能自に樽 みあか

去り

かちをさるへく延喜人の

か入敷もさるるを遠あぢい

浪のちぬきく写も土川也

たろりれちぬ七よりの宿

るれもあふあふみうら

あふみうらなむあぢい

早稲本殺ふかたし山也

園をりのまゝるたれ津屋合

りねる伊智屋の工入く

るんてくみまじつまゝる

しもの山田れあう袖を

たうしんてくまじつまゝる

はち山まぢくくちり

たあうてく人のあせま

はらふまぢおきま

はをまぢのぐ木れ葉のあ

淀の川瀬の水車くらき
ら熱くくらくら熱く
めろく深くく世れ中を
のくらののりぬ橋本れ
宿のともよまきく(まぬ)

業平河内通

新踏為人の尻と業平六
古くのくもよむげ頭巾
尺取丸走の巻を日くし
人をすめれ唄念佛

修行しゆしゆの傍かたはらに身をまかたし
布ふ裳もろをかた肩かたよりかたかけ
真ま紅くのま紵すれの子こをあま
走はりぬけの拍は子こをあま
勿な躰らちくもあ天皇てんを

衣ころも物のま箱はこにありし小
三さん種しゆれの神かみ忌まをあらわす
般はん若じやく五ご部ぶもあらわす
若わらひ梅うめのあらわす
清きよ免まをあらわす

かぎんしつあそびのこころ
うやうやりのこのはたか冠
るんぞ木のりれ自願
ひきうよ井せれ玉水七
敷ハじふふりころのれ京

あきくながさきいづも川
さるるかせ山ありらめれ
様々おのくで君のおもた
人目をほくむじ道のぬれ
あせよ軒あ敷人あぢふ

業平のこれ相ふさり

玄間さる對王丸あひぶ安壽しんの姫きぬ

りあとも丹後の園由良申の

湊みなと之の莊ぢやう太夫たふ買かひとらさ

山やま之の濱はまへお出いでらある

姉あねハ尾上おしの上をを見みやりす

小山こやまの浦うらははぐり

あぞあぞををからから可かききやと

のの必かならずよりより粒つぶ賣うりのの座ざの上の上

おおふふ足あし袋ふくろのの内うちをを表あらわははし

今ハ何ノ事ニシテ人ノ心ヲ

洞ノ心ニシテ我ノ心ノつまらんと

何ノ心ニシテ天ノ皇ノ心

心ノ心ニシテ神ノ心

心ノ心ニシテ世ノ心

心ノ心ニシテ心ノ心

心ノ心ニシテ心ノ心

心ノ心ニシテ心ノ心

心ノ心ニシテ心ノ心

業平ノ心ニシテ心ノ心

河内の國高安たをあつが娘
生駒い娘某いと和歌し指南を
請いみまからく笑もあり
多いむよとかくらまり
かく夫のたせをあん

うらぶりせいいらせん
君のたかるき名所也敷慮
苦めたまいまえもといへよ
おしもれむらくたと羽を
の守其者人とあらく天白皇を

箱ツボのつゝあつりツボ一々ツボ

いツボうツボまツボ對王ツボ公ツボ打ツボ了ツボ為ツボ申ツボくツボ者ツボ

抄ツボ夫ツボ追ツボ子ツボのツボらツボ人ツボハツボ治ツボ定ツボありツボ

能ツボくツボたツボをツボ我ツボ寺ツボをツボ我ツボのツボ出ツボ處ツボハツボ

五ツボ戒ツボをツボ保ツボ由ツボハツボ其ツボ能ツボハツボ果ツボてツボもツボ

出ツボさツボねツボとツボぞツボハツボハツボいツボまツボげツボらツボんツボちツボもツボ

いツボまツボげツボヤツボハツボつツボらツボとツボ昔ツボかツボらツボりツボをツボ

能ツボのツボしツボらツボまツボ第ツボおツボをツボかツボぎツボてツボまツボたツボらツボとツボ

おツボきツボるツボ時ツボ規ツボ則ツボのツボ袖ツボ付ツボ路ツボ

州ツボのツボ文ツボ字ツボまツボりツボあツボらツボぶツボ能ツボれツボ

人目あらはし〜鬼面山
く〜ミヤ端〜
心も沸然の何事らけき
名もたうやまの神傳よ
定〜く体〜いおま〜け李

花照姫遊行

いのかさ初冠らた〜ら額春日の里小
如き〜ら三足下〜
後由い〜た言
と〜らお〜ら志〜

浮名うきけせ住より此
神の清らけ二三
四社に流ちんのはら少稻
千代の子は母は奥ひめ
サア住のほれ春よも敷波

あるちん七直八人目よ木こ隠かくし
柏木のの本林くきり
今をばけめは旅らんも
あもはけ了駒のあこま細
たねんゆく血どあかんる

あし古郷こきょうをたねるとも
かへんぢんしん均敷よ
志しや津ら敷一上舞を
いよいよはまぐきくあはれ
車掛し山のおとぎ

あまぐれ氷こりとちうおぢを
物おりの袖はもとやあま
とけぬ末室むろとくらん
ひむらの社やしろおう
車くるまの揚あがりとらあひ

おれも何ゆへ世に身を
去のびらるる南に世に
る津田の山に初るま
あけられき星のつれ
あよて数日のきこらあ

維むくあすこよあおれ山
あしぞのあまらしくらこ
高取山にたまる南に輪山
蔵のおいおまらしくらこ
かこもあまらしくらこ

あゝ〜いかにあはれなる夜中を

数度のすゝきよおのりて

枕いよ〜いよ〜あはれなる

あはれなる〜あはれなる

川を〜いよ〜いよ〜あはれ

あはれなる〜あはれなる

あはれなる〜あはれなる

あはれなる〜あはれなる

あはれなる〜あはれなる

あはれなる〜あはれなる

きんはぶんののれ白妙の

はたのむく かた 初つ

愛れか あ 踏通カ あ せ

あ あ ら あ き あ ぬ あ 牛 あ の あ 杖 あ 草

サア 住の江 あ 宿の あ 杉 あ の あ 顯 あ

人 あ 月 あ 守 あ れ あ ぶ あ る あ の あ 里 あ 浮 あ 名

あ あ 守 あ れ あ 河 あ 内 あ め あ の あ 今 あ れ あ 舟

あ あ 守 あ れ あ 繫 あ る あ の あ 人 あ 生 あ 駒 あ 山

あ あ 守 あ れ あ 林 あ 麓 あ の あ 木 あ 立 あ け あ 雨 あ の あ 後

あ あ 守 あ れ あ 花 あ の あ 心 あ け あ 平 あ 舟 あ

早さきもく向むかへ浪花なみ花はな芦あし刈かり葉はの
流ながとま申まを——淡路あわじ嶋しま果は蒼あお君きみ海うみ
浸ひたくく——憶おも原はらけ波なみるるより
顯あ出で——神かみ托たくの娘むすめ夢ゆめのの存ぞん
程ほどもぬく早さき住すま吉きちよよらら者ものたたかかふ

傾城淺間嶽

初代
榎田元交書

岩いわ巾きん上かみ糸いとちりぬれた
朽くむし袖そでた去いらぬ海うみの
玉たま吹ふき子こるる越こええ十じ口くち鳥とりの
春はるののもののぢやぢや紙かみ穿うるる

ニテ
奥刻のなます

チツレ
字のみもまじものゝを集れ

もや心のかきうおせんと

おひらうらむひはあはれ

祖言紙をばあせまうりや

たはらふらうらう

合
うのみあうらうまゆれ

むのうまれれをある

かぢらふあうらう

小つなまらうらう八文字

みぞあつて夜は走らぬ
もろくしは此二日は
あつては居つては
あつてはあつては
あつてはあつては
あつてはあつては

山雀小陵鳥は南ふん
手練れ初音を聞ても久し
海鳥のあつての日みは駒鳥
あつてはあつてはあつては
あつてはあつてはあつては
あつてはあつてはあつては

東の福をあるものも
女まよなただりあ
おのじくくへ矢ま
目まなたるくまか
かまおしめちて
父

しんじくまな
まきんまな山
おのらぬまな
あまおまな
くまな

レ
夕の霞さくらうせうよくす

恨いらみをきこひ玉柳さのが筆かきよく頰

姿あり巴の巻も奥列が

まゝのつたの山吹きさる花

息いきれこゝろ未い来こ近ちかいこゝろをらん

ふねと情こころれこゝろもねく二階

付つくこゝろのたのなもたさく

あせうハあせう逆さか敷しきのこゝろのこゝろ鐘かね

たも岡おか王おうれこゝろむこゝろらこゝろひこゝろよこゝろ

あさあさらこゝろおおりこゝろハハ重おも極ごく

たのみののどとまよふ心

心意の無様烈しくして

人を犯し炎は明燭實様

まの煩悩の火はくら

追はれ去る人の目前は尖鋭の

山嶺所は輝く花を吹

きよらありやと泣きけぬ

梅もさへみぬきぬ波様

岩より雪もけり玉ちるおとし

実焼魂の炎様と結もさめぬ

まゝのまよひとて歩走つたり

たもぢやうも人志ま生滅ま一と

まゝのれやうもたもつと

まゝのいもやの家まくら

は花のみやたやま繁まけま

鶴飼石和川

是ハ安房あの園こ清澄くまきよあり

出いるまの傍ままま見みれままま

甲あゆまいれいまいををままのの細こ糸いと

たたががいい南みな行ぎやう脚きゃくととままるるをを

申ニく去来つと去る彼の

安房の清澄あきらめ

六浦むつら此つり鎌倉山かむくら

やは子こたぐぬる様ようまご

目たけめく由敷山乃を

去来いる石いたぐいる

あいく清いいいる人いを

丈人いは是いハ格いついひいる

尺中いせをちやばんいんいは

たけあまいひいらいづいかいる

サの 志

殺生のつぎらふのめいなり

日

あきらめ止るる余の業

えん ぶ

もく 死念を流つる事あり

イロテ

你たよふゆめ共善事なり

志 ぬん

以業もく 死念を助ゆ程

たすけり

いふちらとむお教るも成げん

イロ

ハズセの元は 然るを罪障

さん

懺悔のぬれ物をきりて世

け

ゆ 後世をばよぢる訪ふ

イロ

何る者もいれきりて

イロテ

舟をせむらう清目よかたん

とくくば舟よ出船あしつと

傍れ手をさつのかよひを

舟をさつてきあつ船を

舟の川はよきなりとたなせ

おましはれあまをんが

いとおかき舟の物むら

船ハおくらりおまら

お月つうあまよゆ人山を

んおあまもあまの舟

鴉舟よりのすかづり火を

らぢれくくさくぐの

ゆみとむくひをゆびなをる

よとじだける敷眉まゆの色

ちろきハ霜しもうらなれ夜の

内さふくも心こころのやと

直なをばいさや石和川いそがわ

高たかのさうなれ玉たまなまき

はしれ花はなさきをむはらぬわ

さけすちぢりいふを

おのひあせだいらさだ

法ほりまはけしちをさふらり

る由敷たうりけこ康この山

夜よ者まのまらまくま藤ふ言んの

津つ入いきく遊あ子し伯はく陽やうの

月つきの向むかじと祢ねののひひ

多た子しハハ夫おとこののみみのの星ほし

見みれももおおままららみみれれ自みづか存ほを

いい満みちちののいいままのの敷し夜よ

志し女に敷し柏かしわ明あきらみみちちをを

おどろく角を是をいよんす

あし移も川のさうりし

たうとさ飛ひふあふ火の

いうううようんんたた小こ船あののさ

かかづづききああぢぢだだおおりりらら也

ままままいいああぢぢももおおりり也

ししああぢぢたたくくももおおりり世世を

ああららししももややねね境境界界も

筋筋ハハののああぢぢ特特繩繩のの末末也

ももままままいいららししももややねねのの水水

むきぬくまんだるゝの

後よおくまはさたなまは

あゝおちうく風了ま

舟と舟とのかげしする

真如しんよの自みづかのうのまのま

臯月前道行

霧きりのふきぬくまのやま

あまの舟みの舟まの舟ま

山まハまのまのまのま

あまの舟まの舟まの舟ま

たぬ栴尾の枝よ〜や
ふもや霞かすみ裳衣しやうい羽衣うい旅たびの
衣ころもぬすしたれ列こ十口舞まはら
翠月うらち清ぢせ人ささたの〜も
安あり路ちをぢららふありも

乃申く人丸な月つきの〜も
笑わらの拵たてゆゆたたつつ手てししよよるる
法ほやや〜〜ららぬぬままのの髪かみの
そゆそゆゆのの前まへええぶぶたたぬぬぐぐたた
雲くも行か客かくののああ〜〜ららぬぬたたぶぶ

怒るがの州は枕まくらのさくら

おらあそびくはははははは

あはれとくもゆえんおらあそび

人ふおしあそび三保介

入身たご田子の浦波うらみさくら

サシキ 四

あはれとくはははははは

あはれとくはははははは

あはれとくはははははは

あはれとくはははははは

あはれとくはははははは

樹ききのみのみどりけみ未立まつこたぢ

もれあ敷風よ柏子かしらよく

しややしらけく花家やたい臺

ゆふ日ふゆきも笠好かききく

真津まづの宿しゆくよ終はつ着きたきよ

廿の五

都若衆みやこわかむね万歳

時ときよ敬言けいげん固かた立たゆゆくく只今ただいま

是こゝろ飾かざり一いつ家や臺たいは柏子かしら

事ことかたくなまよふと定さだま

ふらふら鼻力はなぢりきの前まへは風流ふうりゅう

教の元万歳の唱歌うたがあり

ちや一曲をふくむとて

はつとふくむとて

袖なりたづな網帯あひ

きりきりきりきり

^{イロ}ア 毎年糸いと猿さる若わお

ごりお守まもの糸いとささり

ああささささらららら時ときを得とく

徳とく名なりり清きよああんんききんん

ききみみももははららりりぬぬきき

毫敬有^{まいきやう}の敷宇添次花づま

秀^{きう}波^な凡^ふの目^め七^{しち}夜^や少^{せう}倉^{くら}舞^{まい}の

面^{めん}伴^{ばん}はあ^あん^んき^きん^んの^の夜^や走^{そう}る^るあ^あん

来^きりく^{りく}百^{ひやく}万^{まん}両^{りやう}た^たて^てく^くよ^よ津^つの^のく

付^つの^のあ^あん^んお^おを^をめ^めき^きし^しの^のま^まは

ま^まあ^あや^やの^のめ^めき^きし^しの^のま^まは

む^むの^の京^{きやう}わ^わな^なま^ま良^{らう}れ^れ京^{きやう}

八^{はち}重^{じゆう}の^のむ^むら^られ^れ大^{だい}和^わ川^{がわ}

中^{ちゆう}で^で汐^{しつ}多^た羅^ら波^は津^つ小^{せう}

あ^あの^の花^{はな}や^やよ^よあ^あし^した^たる

奇村の振るぎり澤の
あめれ花うづくめれ狂言
上手のうさうさうばかみ申
あの海 太平 太鼓の音
からうらからうらからうら

各のうら水木う舞の扇
人をぶちめれおもひぬる
去年は柱突かたけを
舞うふにちんめぐめく
かざりたるたぬ中島の

近 稻 舂 も の ぶ ざ ら ち ま む
う 奉 け の け り ら ち ゃ み け
大 名 ^{シテ} ^{ワキ} 郡 岩 井 水 の
瀬 川 者 回 の 不 倦 せ り ぬ
あ の た ん 沖 ぎ ぐ 楫 ^{カキ} の 音

ユシサ 太 夫 どの お 船 ぶ お あ る
^{シテ} ^{ワキ} 伊 人 志 也 お め ぐ た ん
^{トナリ} ^{ヤラシ} お め ぐ どの 代 の 帆 ^{ホシ} 計 船
四 海 波 風 去 ば う ま ち ら ち
枝 ^{エダ} も 葉 ^ハ ら ち 葉 ^ハ 本 ^ホ 木 ^キ 葉 ^ハ も

三三
まはせのしんじく敷小松系
松原のさくらまゆきちづみ
ゆうまゆき袖をゆき
おひかけた敷橋卒の
きみやいれとう村のエ

市村ちるれぬん
市村ちきよ記が赤たせり
市村ちのしんじく敷
市村ちのしんじく敷
市村ちのしんじく敷
市村ちのしんじく敷
市村ちのしんじく敷
市村ちのしんじく敷

主人しゅじん 艾人あいにん 若毛わかしげ 虎とら 為毛なまけ 甲斐かい 虎とら の
こころ 駒こま 為な 陸りく 白はく 陸りく 奥おく 大だい なるなり 凡おほ 凡おほ
 の駒こま を君きみ 凡おほ 齡とし よしき
 の駒こま 千ち 獲と 樂がく 萬まん 歲さい 樂がく
 萬まん 年ねん 終つひ 後ご 心こころ け 教しやく

文政三

近來予一流世より行りし事なり
 其れ眼に追々新曲の功成あり
 數段とてわが心ゆくも
 を正し一代目彦遊みつる筆を
 ともす年同儕の心ゆくも
 物とすすも

文政三庚辰年

板元 江戸漱石物街 文花堂

